

興策を講じていただきたいと思いますが、町長の所見を伺います。

答 宗宮孝生町長

中山間地域は農業の生産性・効率性の面で平坦地域と比べまして不利な状況にあります。これまで各地域で、水田の多面的機能の維持をアピールした都市との農村交流などといった地域の特徴を生かした創意工夫のある農業に取り組んできております。当町には豊かな自然を利用した農林漁業体験施設が各地域に設置されております。藤橋のワンダ農園、久瀬の月夜谷ふれあいの里、揖斐高原、春日の森の染織工房、あるいは貸し農園等数多くそろっており、その地域の自然や文化に触れ、地元の人々との交流を通して楽しむ農林業の体験メニューの充実を図り、グリーンツーリズムなどを積極的に推進してまいりたいと考えております。また、葉草やお茶、小菊などの特産品や、温泉、清流などの自然の癒し効果、あるいはマラソンなどによる健康増進、新たに整備される徳山ダムなどの観光施設とのネットワーク化を図るとともに、中山間地域の農業制度である中山間地域直接支払事業を有効活用し、水田や森林を活用した農林業体験交流を促進することにより、交流人口の増加と農林業の振興を図ってまいりたい

いと考えております。

次に和牛の生産でございりますが、畜産業を取り巻く情勢は非常に厳しく、当町の肉用牛飼育農家数は年を経るに従って毎年減少し、現在では3戸という状況になっております。これも高齢化、後継者不足が大きな要因と思われませんが、家畜排泄物による環境問題も一つの要因となっているのではないかと思います。

このような状況の中で、本町の畜産業を振興するに当たっては、穀物飼料への過度の依存や過重労働、環境問題等の軽減、解消を図るため、遊休農地化した土地や山林原野を活用した放牧の導入、あるいは飛騨牛雌牛保留対策事業、これは県が行っておりますが、優良な和牛子牛の導入など促進をし、その土地に合わせた資源循環型の生産方式を振興しなければならぬと思っております。

問 公営住宅の建設について

新揖斐川町は町村合併しても人口が減少していくという統計数値も出ております。旧久瀬村では、過疎対策の一環として、平成10年から村営住宅の建設を進めてまいりました。ほかの旧村においても、同様に村営住宅の建設を進められました。村営住宅の建設は、地域の活性化、学校の児童・生徒の減少に対して大

いに効果がありません。新揖斐川町の新町建設計画にも公営住宅建設計画が上がっていますし、そして既に住宅建設用地を確保しているところもございまして、地域の振興、過疎化対策、学校の児童・生徒の減少に対応するためにも、ぜひ公営住宅の計画を推進していただきたいと考えております。町長のお考えを伺います。

答 宗宮孝生町長

公営住宅の建設についてでございますが、合併後において本町で住み続けたい、あるいは住んでみたい、そうした住宅供給、住環境の再生、あるいは良質な住宅の形成を目指した住宅政策を構築していくために、合併前の揖斐川町における住宅マスタープラン、公営住宅ストック総活用計画で団地別、棟別に活用計画を定め、建て替え等維持管理の必要性、経済性、あるいは効果性、容易性の四つの点から総合的に検討を、団地別具体的活用手法の選定検討結果に基づき、各団地における活用手法を整備方針として整備時期をまとめて、今後、建て替え等事業計画を立ててまいりたいと考えております。

今後、更なる既存公営住宅ストックの活用を必要と高めるとともに、敷地条件等に依りて、建て替え事業、個別改善事業、全面的改善等

の多様な取り組みを考え、一方では、人口の流出、防止及び若者のUターン、Iターン等を受け入れられる住宅の整備、高齢者が安全快適に住める良好な住環境整備、山間部の田園空間を保全しつつ効果的、安定した農業経営の推進を図る住環境整備にも、視野を広げ、住宅地地の整備の向上に努めてまいりたいと考えております。

高橋久好議員

問 老人福祉センター内の入浴施設について

老人福祉センター内の入浴施設は、昭和59年1月に設立されまして、送迎バスを運行しながら旧揖斐川町の高齢者の方々や近辺の方々を中心に、現在も週3回利用しております。最近では、夜間営業の利用の方も一人150円でございます。だんだん少なくなりまして、今では一晩に15人から20人という現状でございます。一日の町水道の利用量も14トンから15トン、冬は15トンから16トンと、このようにも言われております。ボイラーの灯油も1千400リッター、冬は1千500から1千600リッターとも言われております。送迎バスを利用して平均五、六人、雨の日は一人もない、このような状態で経営が、いかにも普通の